

第9回 社会科学の発展を考える円卓会議
(議事録)

日 時：令和6年5月28日(火) 14時00分～16時00分

場 所：遠隔会議(ZOOM)

出席者：江川委員、菅原委員、杉山委員、清家委員、高橋委員、中鉢委員、内藤委員、
渡辺委員、中野委員(議長)、稲葉副学長

欠席者：矢野委員

陪席者：一橋大学 大月理事・副学長、青木理事・副学長、蜂谷理事・副学長、下間理事・
副学長、山田副学長、野口副学長、三隅副学長、中村総務部長、関谷学務部長、
山田研究科等事務部長、総務課大学戦略室

<議事要旨>

中野委員(議長)による趣旨説明の後、稲葉副学長(学生担当)より「次世代研究者挑戦的研究プログラム(SPRING)」事業における本学の取組について紹介を行った。本学は同事業において、大学院教育改革を加速化し、優れた国際競争力を備え、より多様なキャリアパスで活躍できる卓越した博士人材を国内外に向けて輩出することを目標としており、その目標達成のために実施する様々な取組について説明が行われた。

その後、社会で活躍できる社会科学系の博士人材をどのように育成するのか、そのために大学や社会には何が求められるかなどについて委員による自由討論が行われた。

また、今回は「社会科学の発展を考える円卓会議」の第3期最終回であることを踏まえ、これまでに3回開催された本会議を振り返り、各委員の感想や第4期に向けた本会議への期待等が述べられた。

<主な議論内容>

(渡辺委員)

- 10年以上前の企業に勤務していた頃の経験となるが、採用した理工系博士人材の多くは自身の専門分野にとらわれており、博士人材が持つ専門性を企業の課題解決につなげるような応用ができる人材が少なかった。
- そうした意味で SPRING 事業における HIAS(社会科学高等研究院)の異分野交流セミナー等の取組は非常に興味深く、深い思考力と問題発見・解決力等を養成するための教育を博士人材育成の根幹に据えていただきたい。また、国際機関でのインターンシップにおいても、国際機関で働いた経験がある方が指導教員やメンターになることでより学生の視野を広げる教育の機会になるのではないかと。

(菅原委員)

- 本会議の前に、複数の企業の人事担当者に人文・社会科学系の博士人材の採用についてヒアリングを行ったところ、弁護士や会計士などの国家資格取得者と比較して、博士課程を修了した人材にはどのような付加価値があるのか明確になっておらず、学部卒の人材との能力的な差別化が見えにくいという意見が多かった。
- 企業側から人社系の博士人材に期待することは、自身の専門分野にとらわれない高度な問題解決能力や異分野経験、あるいは自身の専門分野とデジタル・AI との融合といった明確に差別化できる要素。そうした博士人材の能力を、インターンシップなどを通じて企業に実感してもらうことが大事になってくるのではないかと。

(江川委員)

- 自分自身も投資銀行で20年間勤務した後で大学院に入って博士号を取得し、その結果自分でも想定していなかったアカデミックの世界での道が開けたが、この事例はやや特殊であり、博士課程修了後の研究者以外のキャリアパスが見えにくいところ、つまり出口の問題が一番大きいのではないかと。
- 企業経営者など様々なところにいる博士号取得者のロールモデルを発掘して、博士号取得の利点などを発信していくことが重要ではないかと。また、博士人材の能力に見合った給与水準の設定といったことを国の政策として考えていく必要があるのではないかと。
- 共同プロジェクトやインターンシップなどを通じた企業と大学院との人材交流や、個人単位では就職情報へのアクセスが難しい国際機関との組織単位でのネットワーク構築等により、博士人材のキャリアパス多様化を期待する。

(杉山委員)

- 三菱地所における大学院生の採用実績は人文社会学系の修士学生の採用が増える一方で、博士学生の採用はいまだない。博士学生の応募自体が極めて少なく、企業側としても採用活動までにどのように学生と接点をもつかが課題となっている。
- ソーシャル・データサイエンス学部・研究科の設置により、企業と博士学生が共同研究等を通じてつながる機会が増す可能性があり、それを起点に多くの企業との接点に広げる努力が必要ではないかと。
- また企業における博士学生の評価（給与処遇）にも課題がある。原則的には年次管理に基づき修士卒は3年目同等となるが、博士卒も5年目と同等とすべきか評価や処遇を整理することも必要だと思う。

(高橋委員)

- 学位取得者数の国際比較データにおいても日本の修士号・博士号取得者数の少なさが目立つ。企業における昇任要件や学校基本調査の項目に追加するなど社会全体で高学

歴化を推進していくしくみを構築することで取得者数を増加させることができるのではないか。「隗より始めよ」ということで博士号取得者を大学職員に積極的に採用することを検討してはどうか。

- 大学評価のコンベンショナルな指標は偏差値や志願倍率、就職状況等であるが、大学ジャーナリストに博士号取得者が増えてくると評価手法にも変化が生じるのではないか。
- 近年非常に多用されている「博士人材」や「IT人材」といった「何々人材」という名称は人を手段視するようにとらえられる。「プロフェッショナル」「研究者」等の名称にシフトすることで専門職をめぐる意識の変化につながればと思う。

(内藤委員)

- 大学院改革の過程の中で、基礎データとなる入学者数や就職率や学位授与率等の数値の重要性を理解しているが、ぜひ知への探求や憧憬を生むような教育を忘れないでほしい。
- 独創的な人材を輩出するためには「若者」「よそ者」「馬鹿者」の3つの要素が必要だと認識している。HIASにおいて「若者 (BRIDGES Next)」や「よそ者 (BRIDGES Distinguishe)」の要素はそろっていると思うので、ぜひ「馬鹿者 (異分野)」の人々との交流によりさらなる新しい知への探究や独創的な人材輩出の可能性を広げていただきたい。

(清家委員)

- 博士号取得者に共通するアドバンテージは、高度な問題解決能力だと認識している。研究テーマを発見し、仮説をたてそれを客観的な手法で検証して結論を導くという学問の方法論は他ならぬ問題解決のプロセスだからだ。問題解決能力と学歴（学士、修士、博士）は正相関すると考える。
- しかし博士課程の学生にとって問題解決能力は、目的ではなく手段であり、研究成果をあげるための方法論でしかない。博士課程の学生は問題解決能力を身につけるためではなく、研究テーマを極めたいというキュリオシティを動機に博士論文に取り組んでいる。
- 博士人材に期待される企業における課題解決では専門分野外となる場合には、モチベーション低下によりその能力が十分に活かせていないとのお話があったが、それは博士論文執筆のプロセスを考えれば極めて自然なことではないか。弁護士や会計士が苦勞の末に資格取得するのは資格によって大きなプロフィットを得られるからだ。しかし若い博士学生は研究活動の苦勞の対価としてのプロフィットの有無にかかわらず真理の探究を行っていて、それ自体は尊いことであり、そうした博士人材の動機と企業側のニーズとのギャップを理解することは重要だ。

(中鉢委員)

- 博士人材が産業界に就職すること自体稀だが、それでも就職の機会を得た博士人材にとって企業における活躍の場は非常に限定的でネガティブではないか。
- 「Science for Science」で邁進してきた人材に、就職した途端に「Science for Business」「Science for Industry」で学位取得者としての付加価値を示し、短期的に結果を出すことを求めるのは相当なプレッシャーではないか。そうした構造が博士課程への進学を躊躇させてしまうのではないか。
- 専門職大学での教育に携わっているが、設置上、教員は全員学位取得者でなければならない、そのうち 3 割は実務経験者であることが求められている。しかし専門職大学の学生と実際に接すると、何のために専門職大学に入学したのか、何を学びたいのか、職業人意識が希薄で、設置要件とのギャップに驚いた。
- SPRING において博士課程学生の支援の紹介があったが、モラトリアム支援にならないよう給付条件付与の検討も必要ではないかと感じた。

<社会科学の発展を考える円卓会議の第3期を振り返って>

(江川委員)

- 多岐にわたるテーマで議論を重ねる中で母校である一橋大学の取り組みを学ぶと同時に、他の委員の意見を伺うことができ非常に勉強になった。

(菅原委員)

- いろいろな意見、見方があることを改めて感じられる非常に良い勉強の機会だった。近年の AI の進化の速さやその社会インパクトの大きさから、これまでの企業活動や社会制度では機能しなくなる可能性を危惧している。これまでの議論を通じて、そうした動きをどのように大学に取り入れていくのか、大学改革と同時並行で入試制度の検討も必要との課題意識をもった。

(渡辺委員)

- 理学・工学で先行していた課題が社会科学の課題としても議論が盛んになり、社会発展に貢献していく時代になったことを嬉しく思う。また本会議の委員の意見が多様性に富んでおり、非常に健全な議論であった。博士人材の多様性をどのように受け入れ育成していくのか、今後の一橋大学の取組に期待している。

(杉山委員)

- 文科省の発信においても「STEM」教育から社会科学を取り入れた「STEAM」教育にシフトしており社会科学をとりまく環境の変化を感じている。今後も一橋大学が中心

となって社会科学のあり方を様々な角度から議論していただきたい。

※STEM/STEAM 教育…科学 (Science)、技術 (Technology)、工学 (Engineering)、芸術・リベラル
アーツ (Art)、数学 (Mathematics)

(清家委員)

- 議論において大切なことは“Disagreeing well”ではないかと時々議論をかわす親しい海外の友人は良く言うのだが、たしかに意見は異なれども互いに尊重しあう風土が自然科学や社会科学の発展に不可欠であろう。本会議は agree することも disagree することもきちんと議論できる場であり、福沢諭吉が「実学」とは自然科学、社会科学に関わらず実証科学であるべきと述べたとおりのディスカッションの舞台となっていたことを有り難く思っている。

(高橋委員)

- これまで議論が行われた国際化や文理融合、ジェンダーバランス、大学院の学位取得状況の改革等において一橋大学が牽引するエンジンとなり社会に大きなインパクトを与えていくことを期待する。

(中鉢委員)

- 人文社会学系の博士人材が、付加価値を発揮し、長きにわたって専門性を発揮していくために、あえて理系の中央研究所のようなところに自ら飛び込んでいくような気概のある学生をぜひ育ててほしい。

(内藤委員)

- 本会議では当初想定とは異なり、各委員が踏み込んだ議論を行っており感銘を受けた。さらなる異論暴論を伺うために、第4期は対面での開催をぜひ提案したい。

(中野議長)

- 過去3回の第3期社会科学の発展を考える円卓会議が実り多いものになったのは、ひとえに委員の皆様のおかげと認識しており、深く御礼を申し上げる。